



1. モーリス・ドニ 《若い母》1919年 国立西洋美術館 松方コレクション

## 黒田もフジタも梅原もー モーリス・ドニとの幸福な往來 キャッチボール

モーリス・ドニ（1870-1943）は19世紀末フランスで、次世代への橋渡しとして、かけがえのない役割を担った前衛グループ「ナビ派」（ヘブライ語で「預言者」の意）の中心人物でした。セリュジエやボナール、ランソンらとともに、絵画の枠を超え、建築、演劇、文学、音楽などと結びつくような創作活動を実践しました。優れた批評家でもあり、造形と文筆の両輪で近代西洋美術史に足跡を残しました。

ドニやナビ派の影響は遠く日本にも及びました。「ナビ派の学校」であるアカデミー・ランソンで、梅原龍三郎のように直接指導を受けた日本人画学生もいました。

本展ではドニの生涯を国内の名品を通して展覧します。そして、それぞれの時期に彼と日本の美術がどのように関わってきたのか、黒田清輝が目にしたであろう初期作品から、ドニに学んだ留学生たちの作品、早くから来日して日本で展示された作品を振り返ることで辿ります。

【注目ポイント】本展は、ナビ派の収集で知られる新潟県立近代美術館と日本洋画研究に力を入れている久留米市美術館の共同企画。2会場での開催です。モーリス・ドニと日本に焦点を当てた展覧会は国内で初めての試みです。

問い合わせ先：新潟県立近代美術館 学芸企画課(平石)

TEL: 0258-28-4112 FAX: 0258-28-4115

## 展覧会の見どころ

### ① ドニと黒田、同時代人の運命的な出会い

### ② 学校をつくる、夢をかなえたドニ。

### ナビ派の学校 アカデミー・ランソンで学んだ日本人たち

### ③ <sup>ひっせい</sup>ドニ畢生の大作《バッカス祭》、ついに国内そろい踏み!!

## 第1章

### ジャポニズムの申し子 | 「ナビ派」の誕生に居合わせた日本人

日本趣味が流行していた19世紀末のパリ。ドニやボナールら若い芸術家によってグループ「ナビ派」が結成されました。平坦な色面や装飾性、大胆な構図は、次の時代の絵画を予告するものでした。象徴主義の作家たちなどナビ派の関連作家たちや、同じ時代のパリにおいてナビ派のデビューを目撃した画学生・黒田清輝らの作品も併せて紹介します。



モーリス・ドニ 《雌鶏と少女》  
1890年 国立西洋美術館



アリスティド・マイヨール  
《山羊飼の娘》  
1890年頃 岐阜県美術館



モーリス・ドニ  
《『ラ・デペッシュ』紙》  
1892年 京都工芸繊維大学 美術工芸資料館



黒田清輝 《夏図習作(横たわる女)》1892年頃 宇都宮美術館



## 第2章

### アカデミー・ランソン | パリの画学生～明治・大正・昭和

美術が大きく変化していく傍ら、ドニも「絵画とは何か」について思索を深めながら創作を続けました。1908年に開校したナビ派の学校アカデミー・ランソンでは仲間たちとともに、教壇に立って後進を指導しました。そこでは梅原龍三郎や足立源一郎ら多くの日本人画学生が籍を置き、直接ドニの指導を受ける者もいました。



2. ピエール・ボナール《子供と猫》  
1906年頃 愛知県美術館



モーリス・ドニ《アルミードの園》1907年 富士屋ホテル



梅原龍三郎《ナルシス》  
1913年 東京国立近代美術館

## 第3章

### 宗教芸術家として | そして彼の絵は海を渡る

生涯を通じて敬虔なカトリックだったドニは、第一次大戦後の1919年にアトリエ・ダール・サクレを設立し、宗教画の復興を目指しました。また壁画装飾など公共の仕事にも精力的に取り組みました。この頃、日本人コレクターによってドニの作品が収集愛好されるようになり、1920年代には日本で実際にドニの作品が展示されました。



3. モーリス・ドニ《ベンガル虎 バッカス祭》  
1920年 新潟県立近代美術館・万代島美術館



モーリス・ドニ《バッカス祭》  
1920年 石橋財団アーティゾン美術館

この2点は、ジュネーブの毛皮店から壁画制作の注文を受けたドニが酒神バッカスを称える宴を描いたものです。左の作品(240.4×258.5cm、232.5×153.0cm)は、フランスからスイスへ、さらにアメリカに渡るうちに惜しくも切断されてしまいますが、2001年に新潟県の所蔵となりました。一方、右の石橋財団アーティゾン美術館の作品(99.2×139.5cm)は、描かれて間もない頃、1920年代に日本人コレクターによって日本にもたらされました。本展は、数奇な運命を辿った2枚の《バッカス祭》がついに並ぶ貴重な機会となります。

展覧会名 日本が見たドニ | ドニの見た日本  
作品数 約 130 点

【新潟会場】

- 会場 新潟県立近代美術館
- 会期 2024年8月27日(火)～10月20日(日)  
[展示替]前期 8月27日(火)～9月23日(月祝)  
後期 9月25日(水)～10月20日(日)
- 開館時間 9:00～17:00(観覧券の販売は16:30まで)
- 休館日 9月2日(月)、9日(月)、17日(火)、24日(火)、30日(月)、  
10月7日(月)、15日(火)
- 観覧料 当日一般 1,500円(1,300円) 大学・高校 1,000円(800円)  
中学生以下無料
- \* ( )内は20名様以上の団体料金です。  
\* 障害者手帳をお持ちの方は観覧料が免除になります。受付でご提示ください。  
\* 高校生、大学生は入場時、学生証をご提示ください。
- 主催 新潟県立近代美術館
- 共催 新潟日報社
- 協力 新潟県立美術館友の会
- 後援 新潟県教育委員会、長岡市、長岡市教育委員会、長岡新聞社  
FM新潟 77.5、FMながおか 80.7、新潟・フランス協会
- 助成 公益財団法人野村財団



〒940-2083 長岡市千秋3丁目278-14

TEL 0258-28-4111 <https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/>

【久留米会場】

- 会場 久留米市美術館
- 会期 2024年11月2日(土)～2025年1月13日(月祝)  
[展示替]前期 11月2日(土)～12月8日(日)  
後期 12月10日(火)～2025年1月13日(月祝)
- 主催 久留米市美術館、読売新聞社、テレQ ■ 後援 久留米市教育委員会
- 特別助成 公益財団法人石橋財団



久留米市美術館

KURUME CITY ART MUSEUM  
ISHIBASHI CULTURAL CENTER

〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015(石橋文化センター内)

TEL0942-39-1131 <https://www.ishibashi-bunka.jp/kcam/>